

こま

小川未明

青空文庫

赤地^{あかじ}の原^{はら}っぱで、三ちゃんや、徳^{とく}ちゃんや、勇^{ゆう}ちゃんたちが、

輪^わになって、べいごまをまわしていました。

赤^{あか}々とした、秋^{あき}の日^ひが、草木^{くさき}を照^てらしています。風^{かぜ}が吹^ふくと、

草^{くさ}の葉^は先^{さき}が光^{ひか}つて、止^とまっているキチキチばったが驚^{おどろ}いて、飛^ひ行^こ

機^{うき}のように、飛^とび立^たち、こちらのくさむらから、あちらのくさむ

らへと姿^{すがた}を隠^{かく}したのでした。

けれど、一同^{どう}は、そんなことに気^きを止^とめるものもありません。

熱^ね心^{っしん}に、こまのうなりに、瞳^{ひとみ}をすえていました。

この時刻^{じこく}に、学^が校^{っこう}の先^{せん}生^{せい}が、この原^{はら}っぱを通^{とお}ることがあり

ます。みんなは遊^{あそ}びながらも、なんとなく、気^きにかかるのであり

ました。見つければ、しかられやしないかと思うのであつた、こんなことをしたつていいという考えが、みんなの頭にもあつたのであります。

三人が、夢中になつてゐるところへ、

「おれも入れてくれないか？」と、ふいにそばから、声をかけたものがあつたので、びつくりして顔を上げると、それは、黒眼鏡をかけた紙芝居のおじさんでした。

「おれも仲間に入れてくれよ。」と、おじさんは、遠慮しながら、いいました。

「おじさんも、べいをやるのかい。べいを持つてゐるの。」と、勇ちゃんが、ききました。

「ほら。」といって、おじさんは、ズボンのかくしから、光^{ひか}った
べいを出^だして見^みせました。

「角^{かく}のケツトンだね。」と、徳^{とく}ちゃんも、三ちゃんも、たまげた
ように、おじさんのべいに目^めを光^{ひか}らせました。

「おら、子^こ供^{ども}の時^じ分^{ぶん}から、こまをまわすのが、大^{だい}好^すきな^きのさ。」
おじさんは、三^{にん}人^{あい}の間^だへ割^わつて入^{はい}るとかがみました。そして、
むしろの上^{うえ}を見^みていたが、

「だれのだい、あのダイガンは？」

「あのベタガンは、三ちゃんのだよ。」

「おれは、あいつがほしいものだなあ。」と、黒^{くろ}眼^め鏡^{がね}のおじさ
んは、子^こ供^{ども}のよう^{よう}に、三ちゃんの大^{おお}きなべいに見^みとれています。

「おかしいなあ、大きなりをして、べいをするなんて……。」「と、徳ちゃんとくは、おじさんの顔かおを見て、げらげら笑わらい出だしました。「なにが、おかしいんだい。おら、子供こどもの時分じぶんから、こまは好きすなんだよ。それは、こんなでなくて、木きのこまに、鉄てつの胴どうをはめたんだ。その鉄てつの厚みあつが広いのほどいいとしたもんだ。あの、三ちゃんさんのダイガンを見みると、おれの持もっていた、鉄てつ胴どうのこまを思おもい出だすよ。」と、おじさんは、いいました。

「その鉄てつの胴どうをはめた、こまをどうしたの？」と、勇ゆうちゃんが、聞ききました。

「こつちへくるときに、友ともだちにやつてしまつた……。なにしろ、十五じふごの暮くれに出でてきたんだものな。あれから十年ねんも故郷こきやうへ帰かえら

ないのだ。」

「それで、おじさんは、こつちへきても、べいをしていたのかい。
」

「じょうだんな、そんな暇ひまがあるかい。小僧こぞうをしたり、職工しよっこうになつたり、いろいろのことをしたのさ。この商売しょうばいをするよ
うになつて、昔むかし、こまをまわしたことを思い出して、ときどきべ
いをするが、おもしろいなあ。」と、おじさんは、子供こどもといつし
よに遊ぶあそのが、なにより楽しめだといわぬばかりに、にこにこし
ていました。

「さあ、やろうよ。」

「よしきた！ しんけんべい。」と、おじさんが、叫さけびました。

カチンと、みんなが、手^てから繰^くり出^だした、鉄砲^{てつぽう}だまのようなべいは、たがいにはじき合^あつて、火花^{ひばな}を散^ちらしました。おじさんのべいは、なかなか強^{つよ}く、輪^わを描^{えが}いては、うなりながら、三人^{にん}のべいをはね飛^とばしてしまいました。

「おじさんの角^{かく}は、すげえな。」と、三ちゃんは、白目^{しろめ}を、くりとさせました。

「そうさ。お宮^{みや}の石垣^{いしがき}や、コンクリートの道^{みち}で、みがいたんだものな。このべいには、だれにも負^まけないという信^{しん}念^{ねん}が入^{はい}っているのだ。天下無敵^{てんかむてき}というやつさ。」

黒眼鏡^{くろめがね}のおじさんは、三ちゃんのダイガンを負^まかすと、てのひらでなでまわして、喜^{よろこ}びました。

「みんな、あすこの草の上へいって、寝転ぼうよ、あめをやるから。」

おじさんは、そういつて、自転車についている箱から、あめを取り出してきて、みんなに分けてくれました。

仰向けになつて、高らかな空を見上げると、しみじみと秋になつたという感じがしました。小羊のような、白い雲が、飛んでいくのを見送りながら、三人は、思い思いに、おじさんの話を聞いていました。

「村に女の子で、お時といつて、おれとおなじ年の子があつて、こまもまわせば木登りも上手だった。隠れんぼをすると、お時は、ぞうりをふところに入れて、家の前にあつた大きなしいの木

に登^{のほ}ったものだ。風^{かぜ}があつて、枝^{えだ}が、ゆらゆら揺^ゆれているのに、
てつぺんまで上^{のほ}るのだから、だれも見^みつけたものがなかったのだ。
男^{おとこ}の子とけんかをして、泣^ないたことのない勝^かち気^きな子^こだったが、
どうしたろうか。」

子供^{こども}たちは、もうおじさんの話^{はなし}を聞^きいていませんでした。

「おじさん、また明日^{あした}おいでよ。こんどは、僕^{ぼく}が敵^{かたきう}討^うちをして、
おじさんの角^{かく}を負^まかしてしまうから。」と、三ちゃんが、いいま
した。

「ああ、いいとも。みんな待^まっていな。」と、黒眼^{くろめがね}鏡^{がね}のおじさ
んは、帰^{かえ}っていききました。その夜^よ、月^{つき}は、みがきたての鏡^{かがみ}のよう
に明^{あか}るかったです。昼間^{ひるま}子供^{こども}たちの遊^{あそ}んだ、赤地^{あかじ}の原^{はら}には、虫^{むし}

の^{こえ}声が、
いっぱいでありました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「日本の子供」文昭社

1938（昭和13）年12月

初出：「小学四年生」

1937（昭和12）年10月

※初出時の表題は「独楽」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年12月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

こま
小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>